

一連の江戸図屏風を素材とした江戸の住まいと都市空間 の復原的研究 (2)

波多野 純

— 歴史資料としての都市図屏風 —

キーワード：1) 江戸，2) 都市図屏風，3) 江戸図屏風，4) 寛永江戸図，5) 厚木市本『江戸図屏風』

1. 研究の目的と成果

本研究は、江戸の多様な住空間と都市空間を、屏風絵など当時の絵画資料から読み解くことを目的とする。

絵画を歴史的な研究資料として用いる場合の、基本的な分析方法の原則は、いまだ確立されていない。描写内容を、そのまま事実あるいは当時の情景の直写と誤認している研究も少なくない。絵画は、あくまでも絵師の創作物であり、絵師や注文主の意図—時代の意志—を読み解くことによって、はじめて生きた歴史資料となる。

そこで本研究では、文献史学・建築史・美術史・服飾史・芸能史などを専攻する研究者が集まり、一連の江戸図屏風を多角的に分析する

本年度の報告は、継続研究の第2報である。そこでまず、昨年度の研究成果を批判的に再検討し、そこから抽出された新たな課題にもとづく研究成果を報告する。

成果の第1は、歴博本『江戸図屏風』(国立歴史民俗博物館蔵・以下、歴博本)に関する、分析の深化である。歴博本を出光本『江戸名所図屏風』(出光美術館蔵・以下、出光本)と対比させ、武家地と町人地の描写面積の割合から、歴博本がいかに支配者の視点から描かれたかを実証する。

さらに、歴博本に描かれた文様に注目し、歴博本の特異性を明らかにする。たとえば、徳川3代将軍家光とおぼしき人物が、桔梗紋を使用しているが、桔梗紋は江戸時代初期には不吉な紋とされた。この指摘は、未だ定説をみない歴博本の発注者さらに絵師を解明する、重要な手がかりとなりそうである。

成果の第2は、江戸を描いた本格的な最古の絵図として知られ、歴博本との対応関係が指摘されている『武州豊嶋郡江戸庄図』(以下、寛永江戸図)について、従来無批判に寛永7・8年(1630・31)、あるいは同9年刊行の図とされてきたことに疑問を提示し、後世の考証(復原)図の可能性を示唆した点である。

成果の第3は、厚木市教育委員会蔵『江戸図屏風』(以下、厚木市本)の発見である。この研究者間でもあまり知られていなかった絵画資料の検討は、江戸時代後期の鳥瞰的な江戸図屏風の分析に、新たな視点を開拓するものと考ええる。

2. 昨年度の研究成果と新たな視点

2.1 昨年度の研究成果—歴博本『江戸図屏風』の分析

昨年度の研究は、歴博本の分析に重点をおいた。まず、歴博本の研究史を整理し、

- 1) 家光時代の江戸を、支配者の視点で賛美的に描いた。
- 2) 発注者は、平氏系の大名、清和源氏系の酒井忠勝、松平信綱と諸説がある。
- 3) 制作年代は、寛永年間から近世中期以降まで、多様な説があり確定しない。

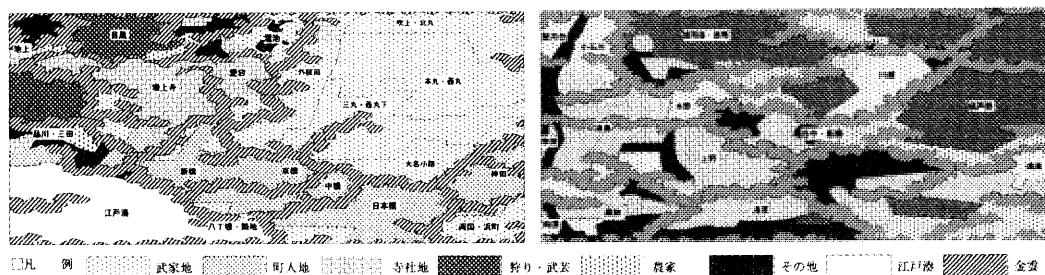
などの点を指摘した。つぎに、それぞれの研究者の専門領域から、歴博本の位置を検証し、

- 1) 歴博本・出光本は、室町時代後期に成立した洛中洛外図を受け継ぎ、名所図のモチーフを組み合わせ、地理的な整合性を絵図から起こした作品である。
- 2) 江戸時代後期になると、透視図法を用い継ぎ目なしに都市景観を擬似的に示した作品が登場する。近世初期のような金雲やすり霞による空間処理を行わないため、都市景観の写実と誤解されがちだが、個々の景観のブロックを組み合わせ、だましの集成図である。代表作として、鋏形紹真画『江戸一目図屏風』(津山市立郷土博物館蔵・以下、津山本)がある。

- 3) 歴博本の空間構造が、寛永江戸図を基礎とすることはすでに指摘されている。たしかに、寛永江戸図は西を上江戸市中を描き、歴博本も同じ視点に立つ。しかし対応関係にあるのは、歴博本では左隻のみであり、右隻には、寛永江戸図からはずれる神田川北側の大名下屋敷や寺社、さらに川越城や鴻巣御殿などの郊外が描かれた。などの点を指摘した。

最後に、歴博本と実際の都市景観の関係を、CG(コンピューター・グラフィックス)を用いて検討し、

- 1) 元和・寛永の頃の華やかな大名屋敷の様相を伝える『向念覚書』(以下、覚書)と歴博本は、彫刻や彩色の豊かさを歴博本で実感し、画題を覚書で知るとような、相互補完的な関係にある。
- 2) 歴博本において、大名屋敷の表門や御成門、櫓門は縮尺を変え、誇張して表現された。
- 3) 町並みの表現においても、特徴的な三階櫓を誇張して描き、整備された武都のイメージを強調した。



図一 歴博本『江戸図屏風』の画面構成

などを明らかにした。

2.2 研究成果をふまえた新たな視角

以上の研究のなかで、新たな研究視角が明確になってきた。まず、一連の江戸図屏風は、制作当時の同時代人の都市空間の認識を反映したものである。同様の認識を示すものに、江戸図と呼ばれる江戸を描いた地図がある。地図の空間表現や描写範囲は、同時代人が認識した都市構造—たとえば、江戸城を頂点に封建的身分秩序を空間化した住区設定—や、城下と認識した地域の範囲を、具体的に示している。以上の視点に立つと、江戸の都市空間を絵画的に描いた江戸図屏風と、地図的に描いた江戸図は、密接な関係にあることになる。

その関係がまず明らかにされなければならない。つまり、同時代の江戸図のどの範囲が、それぞれの江戸図屏風に描かれたかを検証する必要がある。さらに、絵師や注文主の意図、つまり時代の意志が、江戸図屏風において、いかに空間化されたかが問題になる。歴博本の支配者の視点に対して、出光本は庶民の視点に立つ表現であることは、すでに指摘されている。画面上の個々のテーマからも、そのような指摘は妥当性をもつ。

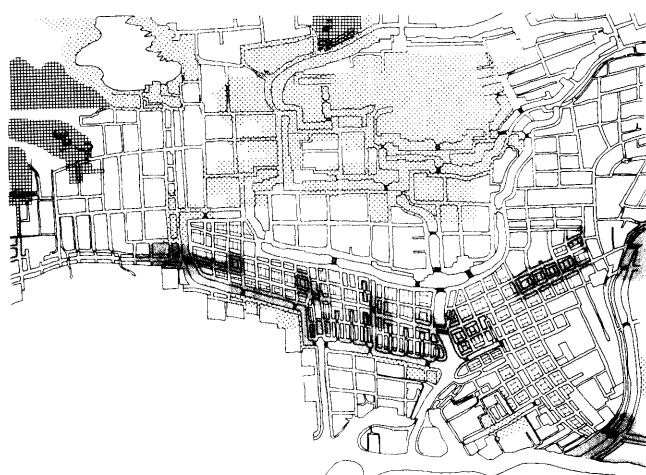
しかし、さらなる検討は必要ないのか。たとえば、初期の江戸図屏風は、歴博本・出光本とも、名所絵などに示された各所の粉本を集積したコラージュであり、その粉本の選択には、絵師や注文主の意図が反映しているはずである。この関係を解明するのが、第1の課題である。

第1の課題を解くにあたり、当初検討の対象とした江戸図は、寛永江戸図であった。ところが検討の過程で、この図にはいくつかの不自然な点があることが明らかになった。とくに、諸本にみられる寛永9年(1632)の年紀は、信頼のおける情報なのかが問題となった。寛永江戸図の歴史的な史料性の検証が、第2の課題である。

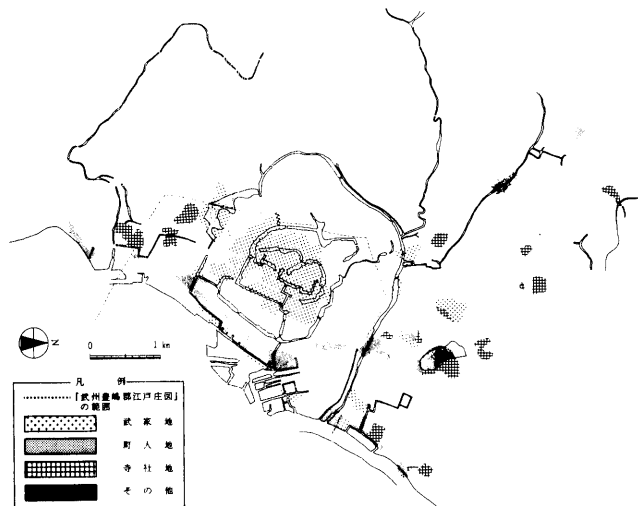
以上は、江戸時代前期の課題であるが、津山本を代表とする江戸時代後期の江戸図屏風に、新たな発見があった。厚木市本である。厚木市本の分析が、第3の課題であるが、これについては概報の域を出ない。

2.3 絵画資料の収集・調査

今回の研究にあたり、江戸を描いた絵画と絵図の収集



図二 『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永江戸図)と歴博本の関係



図三 『正保年中江戸図』(正保江戸図)と歴博本の関係

に努めた。とくに、カリフォルニア大学バークレー校(UCバークレー)における江戸図の収集と、ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム(LACMA)における絵画資料の収集は重要な意味をもつ。

UCバークレーの江戸図は、二百数十枚に及ぶ大規模コレクションである。寛永江戸図から幕末の絵図まで、大絵図・切絵図が、網羅されている。注目すべきは、その多くに「しんまちみつ井」とあり「兎」の印がある点である¹⁾。残念ながら、江戸図として新発見の図は存在しなかったが、火事による焼失範囲など、利用した当時の書き込みが各所にみられ、江戸図がいかに利用されたか

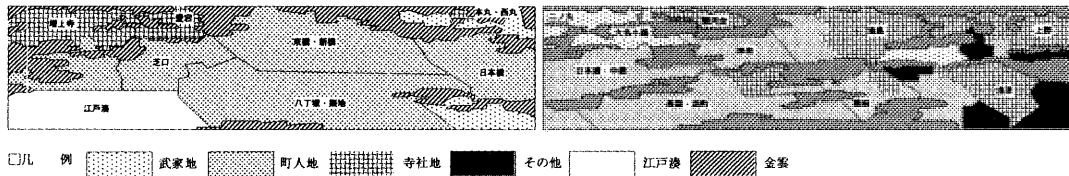


図-4 出光本『江戸名所図屏風』の画面構成

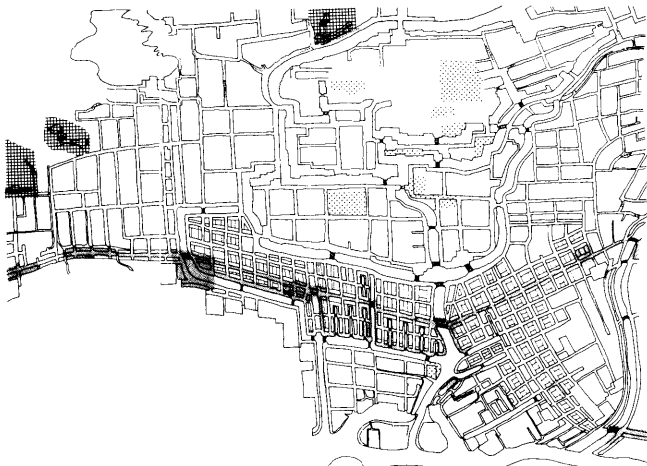


図-5『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永江戸図)と出光本の関係

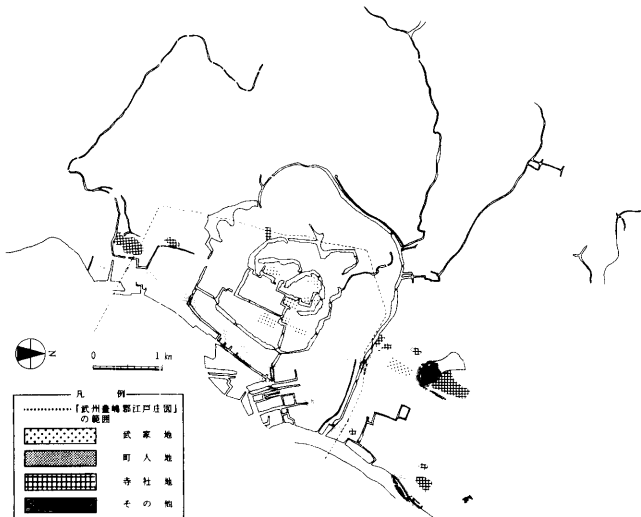


図-6『正保年中江戸図』(正保江戸図)と出光本の関係

を知る手掛かりとして、興味深いコレクションである。

また、LACMAでは、『隅田川駒形堂図』、英一蝶『雨宿り渡船図』をはじめとする、江戸図屏風の元となる名所絵を収集できた。

3. 一連の江戸図屏風の視座

3.1 歴博本と出光本の描写構造の相違

歴博本と出光本に示された絵師や注文主の意図を、読み解く作業のひとつとして、次の作業を試みた。

1) 歴博本・出光本のそれぞれについて、構成要素を武家地・町人地などに塗り分け(図-1, 4)、画面に占める各面積の割合を数量化し比較する(表-1)。

2) 景観年代に近い様相を示す江戸図である寛永江戸図

表-1 歴博本・出光本の画面構成

	屏風上の画面割合		正保江戸図上の面積比率	
	江戸図屏風	江戸名所図屏風	江戸図屏風	江戸名所図屏風
武家地	21%	6%	66%	17%
町人地	11%	48%	13%	47%
寺社地	10%	13%	11%	24%
狩り・武芸家	14%		1%	
農の戸	4%			
その他	7%	3%	9%	12%
江戸橋	5%	5%		
金案	28%	25%		
合計	100%	100%	100%	100%

博本・出光本の景観の範囲を落とし込み(図-2, 3, 5, 6)、地理的な広がりや比重を比較する(表-1)。

この結果、以下の点が指摘できる。

1) 歴博本は、出光本に比して、きわめて広範な場所をとりあげている。正保江戸図は江戸の全域をカバーするとされるが、それからはずれる場所が多い。とくに右隻は、川越、須戸野、鴻巣などの郊外が過半を占め、「江戸図屏風」のタイトルは、必ずしもふさわしくない。

2) 寛永江戸図に落とした景観範囲を比較すると、歴博本が地域的連続性をもつものに対して、出光本はそれぞれが狭い地域として点在する。つまり、歴博本が地図的な整合性を重要な要素とするものに対して、出光本は名所絵のコラージュである。

3) 正保江戸図には、併せて寛永江戸図の範囲を示した。すると、芝の増上寺はその一部を寛永江戸図に含むものの、歴博本・出光本のいずれにも描かれる浅草寺・寛永寺は、寛永江戸図の範囲外である。後にさらなる検討を行うが、これらの寺院および門前が、江戸からの都市域としての連続性をもって捉えられていたか、単に線で結ばれた名所として捉えられていたかが問題となる。

4) 歴博本・出光本それぞれの画面構成上の面積比率をみると、歴博本(武家地2:町人地1:寺社地1)、出光本(1:8:2)となる。歴博本が、武家地重視であることは確かであるが、それにもまして出光本が町人地を重視した名所遊楽図であることがわかる。

5) 歴博本の景観の地域的範囲を正保江戸図に落とし、その面積を計測すると、武家地66%、町人地13%、寺社地11%となる。この値は、実際の面積比と近く、歴博本が江戸の都市構造を正確に反映している、つまり地図情報が基礎になっていることを示している。

3.2 津山本の描写範囲

歴博本・出光本と同様に、津山本の描写範囲を地図上に落とした³⁾。この結果、津山本が、江戸の全域を、き

わめて網羅的に描いていることが明らかになる。そこには、名所絵のコラージュから脱し、俯瞰的な透視図を成立させる、江戸後期の特徴がよく現れている。

4. 歴博本『江戸図屏風』に表された文様

4.1 全体の描写の性格

歴博本は、たいへん不思議な絵画である。右隻千八百数十人、左隻三千百数十人、総数五千人におよぶ人物や風俗が描かれているにもかかわらず、躍動する草創期江戸の熱気や慌ただしさは、一切感じられない。重要なのは、武都江戸の理想像ともいべき壮麗な景観描写であり、人物はその演出のための道具立ての一つに過ぎない。

出光本が、上野・浅草から増上寺周辺までの町人地を中心に、市井の人々の生業や風俗をいきいきと描いているのと対照的である。歴博本の人物は出光本よりもずっと小さいため、直接的な比較は難しいが、添景的な扱い自体に、歴博本の主題のあり方が明確に示されている。

しかし、歴博本の絵師が風俗の描写をなおざりにしているかといえ、答えは否である。髪形にしても着衣にしても、他の絵画や文献史料とほとんど矛盾するところなく、江戸初期の風俗の特色をしっかりと捉えている。

もし、その描写を疑って、別の時代の要素を探そうとしても、決定的な問題点は容易に検出されない。たとえば、身分ある婦人の小袖に大胆な縦縞が描かれていたり、首の後ろで引き結めて丸めた女性の髪形などに、若干の不自然さは認められるものの、モチーフの大きさや人数の多さを考慮すれば、そのことのみで作画の信憑性を云々することはできない。

ただ、出光本が、絵画の様式上も確実に江戸初期に位置づけられ、信頼に足る画像資料としてヴィヴィッドな情報を提供するのに対して、歴博本では、今日までに知られる時代要素のいくつかを追認するにとどまり、当代の風俗に関する新しい情報を抽出することは難しい。

絵画を服飾や風俗の資料として利用する場合、もっとも大切なのは、絵空事をしっかりと見極め、歴史的な確かさの度合いを推し量ることである。そのためには作品の制作年代が、重要な鍵となる。歴博本の場合、江戸前期の絵画のなかに、これに類する作例や近似する様式が見出されず、いまだ美術史上の位置が確定していない。

歴博本が含有するであろう史実は、たいへん大掛かり

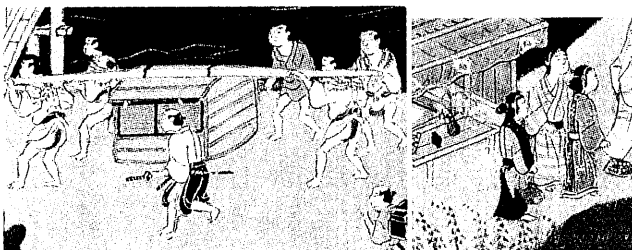


図-7 蛸のモチーフの半纏（歴博本） 図-8 左右で柄を違えた小袖（歴博本）

で貴重であるが、少なくとも服飾や風俗に関する限り、このすべてを江戸初期の実像と捉えることは、今しばらく慎重ななければならない。

4.2 画中の文様の梗概

歴博本には、多数の人物が描かれ、衣服や商標などにも多様な文様が表出されている。歴博本は、出光本に比して、人物の表現が小振りであるため、着衣の細かな文様は省略されている場合が多いが、モチーフの明らかな、特徴的な意匠も認められる。

右隻第6扇下部に描かれたチキリ（千切・緒巻）の文様はそのひとつで、織機に用いられる経糸を巻く中央がくびれた棒状の部分品を、モチーフとする。左隻第1扇下部には「嵐」の文字を染め抜いた着物を着用した男の姿もみえる。このような大文様は17世紀中期に流行した寛文小袖に通じるもので、屏風の景観年代からすれば、寛文小袖の先行様式を描写していることになる。

いっぽう、左隻第2扇中部には、肩を直線に染め分け裾に波の文様をあしらった小袖がみえ、右隻第5扇中程、神田明神付近には慶長小袖を思わせる複雑な染め分けによる小袖もみられる。これらは、新旧さまざまな様式が錯綜する、寛永期の様相を的確に捉えた描写例と、解釈することができる。

左隻第2扇中程には、蛸のモチーフを大胆にあしらった半纏を着た、駕籠舁の姿がみえる（図-7）。蛸文様の半纏は、静嘉堂文庫蔵『四条河原遊楽図』など他の寛永期風俗画の、駕籠舁にも認められる。彼らの着衣は、「走る看板」の役割を担い、とりわけ目立つ文様が選ばれて、陸尺文様―陸尺は駕籠舁のことで力者の訛ったもの―と称された。蛸のモチーフは、足の多さから健脚の意を表したものと思われる。

右隻第5扇下部には、左右の身頃で柄を違えた小袖や（図-8）、身頃と袖で柄を替えた小袖をみだすことができる。とくに前者を、片身替りと呼ぶが、慶長8年（1603）に刊行された『日葡辞書』^{4）}には「カタミガワリノキルモノ」とあり、当時普及していた意匠である。

ところで、寛永期の小袖の縞柄は、格子や左隻第3扇上部にみられるような横縞が主流で、縦縞は異装とみなされ、敬遠される傾向にあった。ことに女性の小袖では稀で、先端的な流行を好む一部の遊女を除いて、ほとんど用いられなかった。歴博本でも、縦縞の小袖は描かれていないが、左隻第3扇上部の山王権現社前には、従者に日唐傘を差し掛けられた、被衣姿の婦人の小袖に、縦縞が認められる。この出立ちは、明らかに身分のある武家の女性であり、この描写には疑念を抱かざるを得ない。ただし、小さな人物表現ゆえに起った誤謬とも思われ、ある程度年代の押さえられた作例中に、同様の問題点を指摘できる可能性も否定できない。

文様の問題からはやや離れるが、男性の髻と口髭の問題について、若干触れておきたい。茶の湯で用いる茶筌の形に似た髻を茶筌髻といい、武家の子息などは前髪を残し中剃りをして、この髻を結った。また、大きく月代を剃って、髻の形が銀杏のようにみえる銀杏髻も、一般の武士から町人まで広く結われた。出光本では、こういった男性的な髪形の者の多くが、口髭をたくわえているが、歴博本では対照的に口髭を持つものは少ない。

江戸初期には、豊かな髭は男性の誇りとされ、髭の薄いことは恥とみなされたが、時代が下ると、髭のない柔和な表情が好まれるようになる。この口髭の描写には、歴博本と出光本の時様風俗に対する視点の相違が、明瞭に示されており、今後の比較検討の材料として注目される。

4.3 注目すべき文様

歴博本の文様、とくに家紋には通常と異った図様に表現されたものがあることが、すでに指摘されている。そのひとつが、剣酢漿草紋である。この紋は、川越城主酒井家の紋として知られるが、その向きが60度ずれている。一般に酢漿草紋は剣が加わると60度回転し、剣の1本が真上を向く。ところが、歴博本の剣酢漿草紋は、どれも通常の酢漿草紋にそのまま剣を加えただけで、2本の剣先が上に開き、1本が真下に向いている（図-9）。

なぜ、絵師が通常と違った形に剣酢漿草紋を描いたのか。理由は定かでないが、黒田屏風として有名な『大坂夏の陣図屏風』⁵⁾をはじめ、歴博本と同形の剣酢漿草紋を描いた例も認められ、その関係が注目される。

江戸中期の江戸図のなかには、酒井家の家紋が、書き入れの関係上、剣先が上を向いているようには見えない位置に配置されている場合もあり、こういった例も考慮にいれる必要があるものと思われる。

歴博本が、家光一代記をモチーフとしていることは論を俟たないが、適宜配された家光と思しき人物の家紋に三葵紋以外が据えられている場合があり、注目される。右隻第1扇中部に描かれた、あきらかに家光と思われる人物の羽織の紋は、典型的な桔梗紋である（図-10）。

桔梗紋は、室町期の『見聞諸家紋』に、土岐氏だけが家紋として用いたとあり、土岐一族の明智光秀が桔梗紋を用いていたことは、有名である。しかし、主君信長を討ったことから、謀反人の家紋としての印象が強まり、一時期嫌悪されるようになった。大坂夏の陣で活躍し大和郡山城主になった水野勝成は、もと桔梗紋を家紋としたが、これを嫌って懸魚紋に替えたといわれる。そのほか桔梗紋を廃した武士も少なくなかった。いっぽう、加藤清正は、臆せず桔梗紋を使い続けたが、清正の死後、加藤家は取り潰しの悲劇にあっている。

つまり、江戸前期において桔梗紋は、けっして幸運の

モチーフではないのである。その桔梗紋を、なぜ家光と思しき人物が、使用しているのか。現段階では、まだ明快な答はないが、今後の重要な検討課題である。

5. 『武州豊嶋郡江戸庄図』をめぐる諸問題

5.1 寛永江戸図系列の江戸図と出版事情

歴博本と密接な関係が指摘される『武州豊嶋郡江戸庄図』（寛永江戸図）についても、江戸図屏風と同様に、さまざまな問題点が指摘されている。まず、寛永江戸図と、これと同様の版式をもつ寛永江戸図系列の江戸図について、基礎的な事実関係を確認する。

寛永江戸図系列の江戸図は、寛永江戸図にはじまり天和2年（1682）刊行図までが確認されている（表-2）⁶⁾。

寛永江戸図系列の特徴として、範囲が江戸府内に限定され、江戸城中の殿舎を絵画的に表現し、縮尺・方位が不正確であること⁷⁾、西を上にし、町名記載を別にすれば、屋敷名の文字が一方向から読めるように揃えて記載されていること⁸⁾が指摘されている。この屋敷名記載方式は、携帯のための便宜とされる⁹⁾。こうしたことは、寛永江戸図系列が武家屋敷に関する情報の提供を、主たる目的としていたためと考えられる。

また、題額をもつのが、寛永江戸図系列の特徴と指摘されている¹⁰⁾。承応江戸図（②-表-2の番号による、以下同様）から寛文6年（1666）4月刊行図（⑩）までは、図中に割り込む形になっているのに対し、寛永江戸図（図-11④）では、図の上に乗る形で、装飾性も高く、寛永江戸図系列の中でも異質である。また、寛文6年7月刊行図（⑪）以降は、題額がなくなってしまう。版形からみても、寛文6年7月刊行図以降は、縦・横半分ほどに縮刷し、より携帯の便宜をはかっている。

寛永江戸図系列の中では、明暦江戸図（③）のみが、北を上にした縦長の版形をとる。こうした版形は、一般に江戸図が西を上にする横長の版形をとるのと比べると、例外的な版形といえよう。そして、明暦3年（1657）3月に、京都の板元河野道清が刊行した新板大坂之図と、多くの類似性がみられる。板元名に「江戸日本橋二丁目太郎右衛門」とあるが、もし、この明暦江戸図が刊年の年次に刊行されたとするならば、京都の板元によってではないかと推測される。さらに、承応江戸図は京都で刊行されたという指摘がある¹¹⁾。

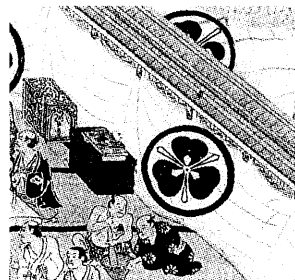


図-9 剣酢漿草紋（歴博本）

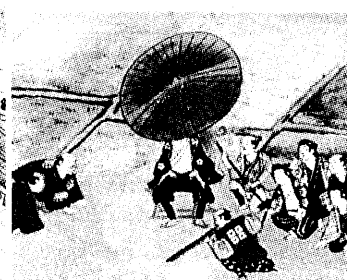


図-10 桔梗紋（歴博本）

つまり、寛永江戸図も、記載内容と同時代に刊行されたとするならば、京都で刊行された可能性が高い。なお、承応江戸図は、後世の刊行とする説もある¹²⁾。いずれにしても、承応江戸図・明暦江戸図は、模写図でしか伝来しておらず、刊年記事と実際の刊行年が一致するか否かは、疑問である。

寛永江戸図については、寛永年間に数版が刊行されたとされるが¹³⁾、現存する原版とされる図は、版式からみて寛永年間ではなく、後世の刊行と考えられている。

刊行年代については、1) 版式からみて、寛永9年(1632)以前の内容をもつ写図をもとに、寛永末年から正保・慶安頃に実用を目的として刊行された¹⁴⁾、2) 刊行は寛文以前、承応・明暦頃¹⁵⁾、3) 写図をもとに、寛永末年か正保初年に、京都で刊行された¹⁶⁾などの諸説がある。さらに、万治4年刊行図(⑤)をもとに編修された、後世の編纂図の可能性が高いとの説¹⁷⁾もある。

確かに、寛永18年以前に刊行されたという『寛永平安町古図』と比べても、装飾性が強く、寛永年間刊行の可能性は低い。

寛永江戸図には、刊年・板元名の記載はない。京都図でも、慶安5年(1652)刊行の『平安城東西南北町並之図』にはじめて刊年・板元名が記載されるようになる。したがって、寛永年間では刊年・板元名がないのが一般的であり、古板絵図の版式を踏襲したものとはいえる。

刊年が記載され原版が現存する刊行江戸図で、最も古いものは、万治4年刊行図である。これ以降、寛文6年4月刊行図(⑩)まで、板元名の記載のないものもあるが、京都の板元の河野道清、もしくは河野角丞が刊行したと考えてよからう。ところが、寛文6年7月以降は、前述したように、版形を小さくして、ほとんどは江戸の板元が刊行している。つまり、万治4年から寛文6年4月まで、『新板武州江戸之図』という内題(題額)をもつ、大版の江戸図が京都の板元から刊行され、寛文6年7月から天和2年まで、『新板武州江戸之図』よりも小型で実用性の高い、題額をもたない江戸図が刊行されたことが確認できる。

また、万治4年刊行図の刊語によると、明暦大火以前の刊行江戸図の存在が示唆され、大火後の都市改造により、江戸市中が大きく変化したので、旧図を改めて、『新板武州江戸之図』として刊行したとしている。同様に、明暦江戸図(『新添江戸之図』)の刊語をみると、新しく「好景」の西南部地域を添えたと説明されているので、これ以前にも刊行江戸図が存在したことになる。承応江戸図(『武州古改江戸之図』)の刊語でも、古板の図の誤りを改めたと説明されているので、さらに古い刊行江戸図があったことになる。この古板図が寛永江戸図になるのだろうか。

しかし、前述したように、承応江戸図は後世の刊行の

可能性が指摘され、承応江戸図・明暦江戸図ともに原版が現存していないので、結論は留保せざるをえない。

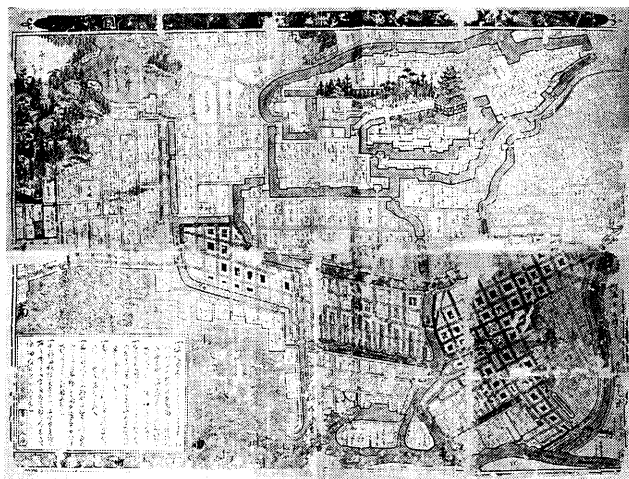
なお、「武州豊嶋郡江戸庄図」という題名にも疑問が残る。江戸について、慶長年間に江戸宿という呼称が用いられることもあったが、寛永年間に江戸庄という呼称が用いられることはなく、江戸に武州もしくは武蔵国を冠するのは、ほぼ中世にしかみられず、また、豊嶋郡を冠称することもなかった。

5.2 寛永江戸図系列の地域上の範囲

寛永江戸図に描かれた地域上の範囲は、ほぼ北は神田川、西は内郭の外側の麴町、南は増上寺、東は隅田川までである。これは当時の江戸の市街を、すべて含んでいるわけではない。刊語によると、東は千住口、および浅草の外まで(奥州海道)、南は芝・品川口まで(東海道)、西は麴町口から武蔵野の原五つ塚まで(北国海道)、北は神田・飯田橋口から王子まで、市街が続いているとしている。寛永江戸図が、これよりもはるかに狭い範囲に限定し、しかも機械的に切り取ったような範囲としたことの説明はなされていない。

そして、明暦江戸図は南西に範囲を拡大し、さらに、万治4年刊行図は、東に範囲を拡大し、明暦大火後に新たに開発された本所・深川を収録した他は、北・西・南は、寛永江戸図からやや広げた範囲にとどまっている。寛文6年4月刊行図で、やや東へ範囲が拡大するものの、ほぼこの範囲が、天和2年刊行図まで継承される。つまり、寛永江戸図の範囲で、当時の江戸市民にとって、十分に地図としての実用性があったことになる。

当時は、行政的に明確には、江戸の範囲は定められていなかった。慶長年間から寛永初年までの江戸の状況を記した『慶長見聞集』は、「江戸より外へ出る口」として、品川口・田安口・神田口・浅草口・舟口の、5口をあげている。また、承応4年(1655)に、農村からの馬方に、江戸市中での乗馬を禁止しているが、その範囲は、芝口



図一11 『武州豊嶋郡江戸庄図』(国立国会図書館蔵)

は札の辻より内、浅草口は駒形堂より内、その他は下谷・本郷・小石川・牛込・市谷・麹町・赤坂の御門より内とされる¹⁸⁾。芝と浅草を除けば、江戸城外郭の内側が江戸市中となる。寛文元年（1661）の触でも同様の範囲が示されるが、その後、周辺部への市街地の拡大にともなうて、江戸市中の範囲も広がった。こうしたことから、17世紀中期までは、寛永江戸図系列の範囲に、江戸市中は納まっていたといえる。

しかし、寛永江戸図系列の江戸図は、江戸市域の拡大にともなうて、図の範囲が限定されていたことや、縮尺・方位の不正確さのため、江戸の周辺部までを含み、地図として精度の高い、寛文10～13年に刊行された、いわゆる寛文五枚図と、その系列の江戸図にとってかわられた。

5.3 寛永江戸図の伝来

つぎに、寛永江戸図の模写・模刻の状況を検討する。現存する寛永江戸図について、模写図・刊行図を問わず収集・整理したのが、表-3である（未見のものを含む）。①（表-3の通し番号による、以下同様）は、かなり古い刊行図で、寛永江戸図の原版といわれ、破損部分も多いが、前述したように、寛永年間の刊行ではないとされる。

まず、模写図についてみると、ほとんどに刊年の記載がある。多くに原版にはない「寛永九年申十二月」の刊年が書き込まれている。安永9年（1780）に模写した瀬名貞雄は、駿河大納言忠長・松倉豊後守の屋敷が記載されていることから、寛永11年以前の図と、考証している（②）。そして、瀬名模写図を近藤守重が寛政2年（1790）に模写した時には、「寛永九年申十二月」と朱書され、「一本此年号アリ」と朱注されており、さらに「重開板」とも付記されていた。また、天保4年（1833）刊行の模刻図に付された屋代弘賢の考証によると、藤堂大学頭・加藤式部少輔・鳥居土佐守・本多美濃守の屋敷が記載されていることから、寛永7、8年の刊行図としている。これを前提として、寛永9年に「重開板」されたという理解が生まれたのであろう。

こうした考証の成果を刊年として書き込んだのが、「寛永九年申十二月 重開板」ということになる。つまり、寛永9年という刊年は、図の内容を考証した成果であって、実際に刊行された年次を示すものではない。なお、寛永9年12月の刊行だとすると、江戸城西南に記載された加藤肥後守の屋敷が存在しないので、井伊掃部頭に訂正している図があるのは、模写の段階で、寛永9年12月の刊年に合わせて図中の記事を訂正するという、さらなる考証の成果である。

つまり、寛永年間に複数の版図が刊行されたわけではない。なお、「元和六庚申年十二月」（⑦）という刊年は何にもとづいているのかは不明であるが、寛永江戸図は、元和年間の測量図が官庫にあり、これをもとにし屋敷名

などを訂正して刊行されたという指摘もある¹⁹⁾。また、模写図では、ほとんどが原版の破損部分を修復している点があげられる。もちろん修復後の図を模写した場合もあろう。

模刻図についてみると、原版そのままに、すべてが刊年を記しておらず、ほとんどが破損部分もそのままの状態

で模刻している。模写・模刻の年代をみると、模写は、安永9年から確認でき、天保4年以降に及んでいる。模刻図の刊行は、これと入れ替わる形で、文化8年（1811）に瀬窩主人の識語を付して刊行され、文化12年には縮刷版が、天保4年には屋代弘賢の考証記事を傍書して刊行されている。また、嘉永6年（1853）に刊行された『御江戸図説集覧』にも分割して収録されている。この他に刊行年次が不詳のものもある。少なくとも18世紀後期以降に、寛永江戸図に対する需要が大きかったことが、確認できよう。

寛永江戸図を中心として寛永江戸図系列について検討

表-2 寛永江戸図系列の江戸図

№	題 名	刊 記	版 元	位置(タテヨコ)	備 考
①	武州豊嶋郡江戸庄図	ナシ	ナシ	約93.0×130.0cm	国立国会図書館 他所蔵
②	武州古改江戸之図	承化二年己未中夏日	ナシ	約64.0× 84.0cm	国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、東洋文庫、東京国立中央図書館、京都国立中央図書館、港区立みなと図書館蔵
③	新嘉江戸之図	明暦三丁酉年正月吉辰	江戸日本橋二丁目太郎右衛門	約120.0× 60.0cm	東洋文庫、東京都公文書館、港区立みなと図書館蔵
④	ナシ	万船二己未改板	江戸日本橋南二町大経助加兵衛	48.5× 71.0cm	江戸図書目録蔵
⑤	新嘉武州江戸之図	万船四年辛丑三月吉辰	京町町野道清	85.5×123.5cm	三井文庫所蔵
⑥	新嘉武州江戸之図	寛文二年壬寅二月吉辰	京町町野道清	83.5×120.0cm	江戸図書目録蔵
⑦	新嘉武州江戸之図	寛文二年壬寅二月吉辰	ナシ	83.0×121.5cm	東洋文庫、岩崎文庫所蔵
⑧	新嘉武州江戸之図	寛文四年甲辰二月吉日	京六条町野道清	83.0×120.0cm	江戸図書目録蔵(江戸図の歴史別冊)による
⑨	新嘉武州江戸之図	寛文四年甲辰二月吉日	ナシ	85.0×121.8cm	江戸図書目録蔵(江戸図の歴史別冊)による
⑩	新嘉武州江戸之図	寛文六年丙申月吉日	京東六条新屋敷方町野道清	95.1×120.6cm	大倉書記堂文庫所蔵
⑪	ナシ	寛文六歲丙申七月吉日	江戸日本橋南二町大経助加兵衛	47.5× 70.2cm	東京大学総合図書館所蔵
⑫	ナシ	寛文六丙申年八月吉日	京東六条新屋敷方町野道清	50.5× 70.5cm	国立国会図書館蔵
⑬	ナシ	延宝五丁巳天正月吉日	不詳	49.0× 70.0cm	東京都立中央図書館蔵
⑭	ナシ	延宝八申五月日	大和屋	約62.0× 75.0cm	東京都立中央図書館、三井文庫所蔵
⑮	ナシ	天和二歳改	通町町本屋三右衛門	51.5× 70.5cm	三井文庫所蔵

表-3 寛永江戸図一覧

№	題 名	原 図 の 刊 記	図写の部	図写の年代	図 写 の 者	複製図の位置	位置(タテヨコ)	所 蔵 所	備 考
1	有	ナシ	墨刷多彩色	不詳			94.0×126.5cm	国立国会図書館	寛永江戸図の原図か?
2	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	寛永九年申十二月	藤堂大学頭・加藤式部少輔・鳥居土佐守・本多美濃守	そのま	93.5×126.5cm	国立公文書館内閣文庫	瀬名貞雄蔵本
3	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	天明元年等寛永九年等寛永九年等寛永九年等	江崎町野道清・田中健行・堀江良雄蔵	複製	92.0×127.5cm	港区立みなと図書館	瀬名貞雄蔵本・田中健行蔵本・堀江良雄蔵本の等
4	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	天明元年等寛永九年等寛永九年等	寺村保俊	複製	93.0×131.5cm	東京都公文書館	高田村蔵本の等・高田村蔵本の等
5	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	寛政元年等寛永九年等	必勝守重	複製	100.0×129.5cm	東京都立中央図書館・東京史料館	瀬名貞雄蔵本の等
6	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	寛政元年等寛永九年等	御前・寺村保俊	複製	97.0×131.0cm	東京都立中央図書館・東京史料館	瀬名貞雄蔵本の等
7	有	元和六庚申年十二月	模写多彩色	文化元年	野村寛長		83.7×117.5cm	大倉書記堂文庫	
8	有	寛永九年申十二月	模写多彩色	文化元年	御前・寺村保俊			東京都立中央図書館・野村文庫	野村文庫蔵
9	有	寛永九年申十二月	模写多彩色	文化元年	不詳			東京都立中央図書館・野村文庫	
10	有	元和六庚申年十二月	模写多彩色	不詳	不詳	複製	87.5×118.0cm	東洋文庫、岩崎文庫	
11	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	不詳	不詳	複製	92.0×115.0cm 92.5×123.0cm	東京都立中央図書館・東京史料館	
12	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	不詳	不詳	複製	94.5×127.0cm 89.0×118.0cm	東京都立中央図書館・東京史料館	
13	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	不詳	不詳	複製	91.5×128.5cm	東京都立中央図書館	
14	有	寛永九年申十二月 重開板	模写多彩色	不詳	不詳	複製	83.0×112.0cm	東京都立中央図書館	
15	有	ナシ	模写多彩色	不詳	不詳	そのま	85.0×116.0cm	三井文庫	
16	有	ナシ	模写多彩色	文化元年	不詳	そのま	90.0×124.0cm 95.5×134.5cm 93.5×135.0cm	東京都立中央図書館・三井文庫 国立公文書館内閣文庫	「不詳蔵本」とある 外題：寛永江戸図 外題：寛永江戸図
17	有	ナシ	模写多彩色	文化元年	不詳	複製	46.0×69.0cm 47.0×68.0cm	東京都立中央図書館・東京史料館 東京都立中央図書館・東京史料館	
18	有	ナシ	模写多彩色	天明元年	不詳	そのま	94.0×135.0cm 91.0×135.0cm 90.0×136.0cm 91.5×137.0cm 93.0×137.0cm	国立国会図書館 国立国会図書館 東洋文庫、岩崎文庫 東京都立中央図書館・東京史料館 三井文庫	
19	有	ナシ	模写多彩色	同年不詳	不詳	そのま	91.5×134.5cm 92.5×123.0cm 91.5×122.5cm 93.5×124.5cm 92.5×123.0cm 95.0×135.0cm 91.0×124.5cm 92.0×124.5cm 92.0×124.5cm	国立国会図書館 国立国会図書館 東洋文庫、岩崎文庫 東京都立中央図書館・東京史料館 三井文庫 東京都立中央図書館・東京史料館 STANFORD UCL A BARRY COLLECTION	
20	有	ナシ	模写多彩色	同年不詳	不詳	そのま	81.0×124.0cm	早稲田大学図書館	
21	有	ナシ	模写多彩色	同年不詳	不詳	そのま	89.5×124.0cm 89.5×122.5cm 88.5×121.0cm 89.0×122.5cm	東洋文庫、岩崎文庫 東京都立中央図書館 東京都立中央図書館 三井文庫	
22	有	ナシ	模写多彩色	寛永元年	不詳	そのま		国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、東洋文庫、東京都立中央図書館、京都国立中央図書館、港区立みなと図書館蔵	明治江戸図蔵本に付録

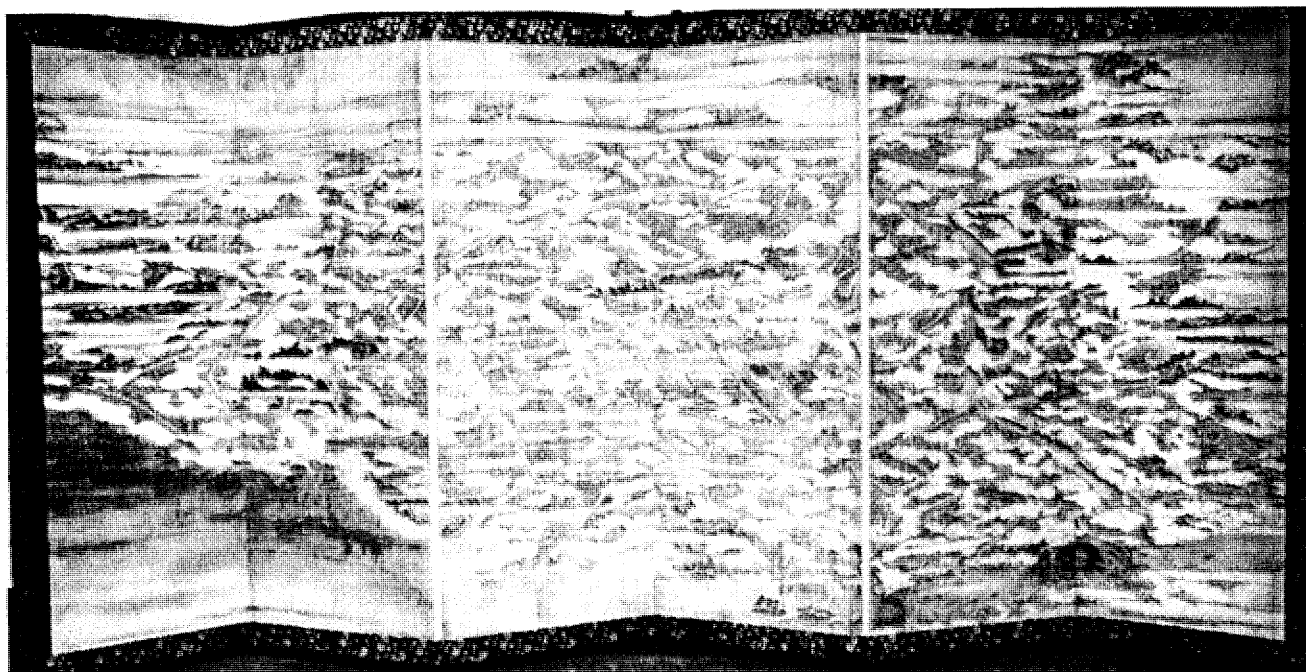


図-12 厚木市本『江戸図屏風』

を加えてきたが、多くは推論にとどまらざるをえない。

寛永江戸図・承応江戸図・明暦江戸図については多くの問題が残されているが、もし内容と同年代に刊行されていたとするならば、後世に原版が伝存しなかったのは、明暦大火の、江戸の文物に与えた被害の大きさを物語っていることになろう。あるいは、後世の編纂図だとするならば、江戸の考証学のレベルの高さを改めて評価する必要があるだろう。

6. 新出の厚木市本『江戸図屏風』について

6.1 一連の江戸図屏風と厚木市本の位置

江戸図屏風は、その景観構成上二つのタイプに分類される。ひとつは、雲形をもって不必要な部分をカットするタイプで、歴博本や出光本など、江戸初期から制作された作品群である。もうひとつは、景観をシームレスに、俯瞰するタイプで、津山本をはじめとして江戸後期に成立する作品群である。

後者の、津山藩松平家御用絵師・楸形紹真（浮世絵師北尾政美）が文化6年（1809）に描いた津山本は、江戸の町並みをシームレスな景観として、透視図法を用いて描いた俯瞰図である。すでに、享和3年（1803）、紹真は大々版の「江戸名所之絵」を上梓しており、これらの新しい江戸の都市景観図は、広く人口に膾炙した。

いずれの江戸図屏風にしろ、制作過程における画面構成の上で、地図としての江戸図が基本にあることは間違いないが、相互の関係は明かでない。さて、このように一連の江戸図屏風の成立にかかわる、地図としての江戸図と、その制作過程を考察するのにちょうど都合のよい作品が、今回の調査のなかで浮上した。神奈川県厚木市教育委員会に現在所蔵されている厚木市本『江戸図屏

風』六曲一隻（図-12）である。

6.2 厚木市本の現況—絵図から屏風へ—

厚木市本は、落款も署名も年紀もなく、所伝も不明である。紙本淡彩で、現在は中屏風（画面実寸117.7×264.0 cm）に仕立てられている。しかし、本来は絵図として作られ、折り畳んでに保管されていたものを、屏風に仕立て直したことが、折り跡や紙継ぎ、トリミングの状態から判明した。惜しいことに、左右の部分が、屏風の寸法に合わせるために、裁ち落とされている。とくに右側には、浅草寺や吉原などが連続して描かれていたと想定され、重要な情報源が失われてしまった²⁰⁾。

6.3 厚木市本の描写範囲

厚木市本が描く地域上の範囲は、本丸を中心とした江戸城（図-13）と、内堀・外堀を中心に、東は隅田川の東岸を少し取り込み、北は一恐らく浅草寺・待乳山聖天・吉原も描かれていたと思われるが切断されている一屏風仕立てとなった現状では、東叡山寛永寺と不忍池や「板橋」の地名書き込みで表現され、西は護国寺を含み、南は品川となっている。もちろん、津山本などが参考になっていることは、明白であるが、それらにない地域の様相も、厚木市本には描かれている。

また、津山本など楸形紹真の作品は、絵画的な遠近感を強調するため東海道を新橋あたりまで、稲妻形に描いている—本来は直線なのに、稲妻形に描くことによって距離感を出す—。いっぽう、厚木市本では、おのおのの道の曲がり具合のほうを重視した表現となっている。この表現上の相違は、厚木市本の成因を探る重要な要素となろう。また、地図から絵図へ、さらに絵画としての都

市景観図へ展開する、創作の構想から実践への過程を知る上で、厚木市本は重要な位置を占める作品である。

6.4 厚木市本の特徴

厚木本の特徴を、列記してみよう。

- 1) 地図を、具体的な視覚情報資料として絵図化した、江戸情報絵図である。
- 2) そのことにより絵画としての「江戸図屏風」の制作過程の一部分が想定できる。
- 3) 大名屋敷、町並み、橋梁、火の見櫓、邸内や戸外の樹木の様子、芝居や見せ物の興行の小屋、木戸や道ばたの小屋など、江戸の都市景観にかかわる住空間の基本が、具体的に視覚化されている。
- 4) 龍の口にある屋敷に「龍口御上ヤシキ」と書き込まれており(図-14)、大名細川家の家中で作成した可能性が高い。
- 5) 大名屋敷の配置と、江戸の地理的要素―広小路や掘割、特徴ある地形、坂、曲がった道など―を丁寧に描いており、細川家の新規江戸詰め家臣―国元から初めて江戸へ出てきた者―への、江戸案内の視覚教材として制作された可能性がある。
- 6) 絵と文字の二つの視覚情報により、位置関係や必要な事物を表現している。
- 7) 従来の江戸図屏風に多く描かれた人物が、一切登場しない。このことも、厚木市本が情報絵図あるいは案内絵図として制作されたことを示している。
- 8) 地図を絵図化したということは、第3扇の上部に丸枠のなかに「東西南北」と朱書きされた方位が記されていることから明白である。

さらに、景観年代は、

- 1) 中村座と市村座が堺町と葺屋町²¹⁾(図-15)にあり、両座が森田座とともに浅草へ移転する天保13年(1842)2月以前の様相を示す。
- 2) 「谷中感應寺、當時天王寺ト改ム」とあり、天保4年(1833)に、谷中感應寺(法華宗不受不施派)が幕命により雑司ヶ谷へ移転となり、その跡に天王寺が創建される天保6年9月以降の様相を示す。



図-13 江戸城(厚木市本)

以上の点と、大名の受領名などから、天保6年9月～天保13年頃となる。

また赤坂御門外の紀伊家の右側(北側に相当)には、雲形のなかに角柱状のものが描かれている(図-16)が、これは吹上への水道のサイフォンであろうとの見方もある。水道関係の資料を搜索しているものの、いまのところ不明である。ここでは指摘のみにとどめたい。

このように、厚木市本は、江戸の景観図として、絵画としての江戸図屏風(たとえば歴博本など)が制作されるにあたり、地図や記録などを手がかりとした制作過程において、絵画として強調されたり、歪曲されたり、削除されたりする情報があったことを、比較の上で確認することができ、また一方で地図を視覚的な情報として仕立てるために絵図化した好個の例として提示することができよう。たとえば、日比谷御門の描き方(図-17)をみると、大名小路の側から地図に添って描き起こしてきたところ、描くものが南方(絵では左手)とズレてしまい、無理をして辻褄あわせをした形跡(消して描き直しをしている)が認められる。同様の修正箇所は、他にも存在する。

7. 結論

一連の江戸図屏風を素材に、江戸の住まいと都市空間を復元的に追求してきた。そのなかで、絵画とくに都市図屏風を研究の基礎資料とするために、明らかにしておかなければならない点が、鮮明になってきた。

いかなる利用目的をもって、どのようなメッセージを伝えようとして、制作されたか。絵師や発注者の意図―時代の意志―が解明されなければならない。さらにその制作過程が問題になる。

- 1) 検討の対象とした歴博本・出光本・津山本・厚木市本は、いずれも現在は屏風仕立てとなっている。しかし、歴博本・出光本が、観賞用の調度品としての屏風絵であるのに対して、津山本は襖絵であり、厚木市本は折り畳まれた情報絵図であった。当初の利用目的の差は、絵画としての表現と対応する。歴博本・出光本には、金箔押し地による源氏雲が、多用された。津山本は、淡彩の略

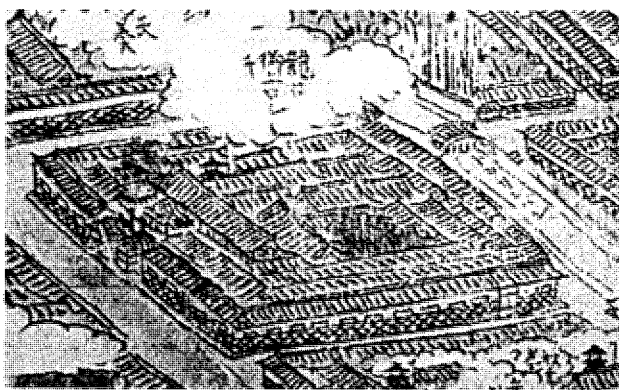


図-14 龍口御上ヤシキ(厚木市本)

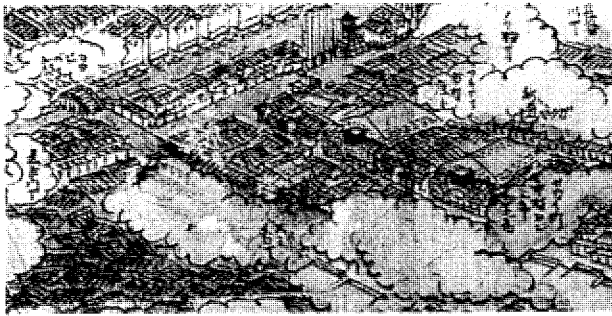


図-15 堺町・葺屋町（厚木市本）

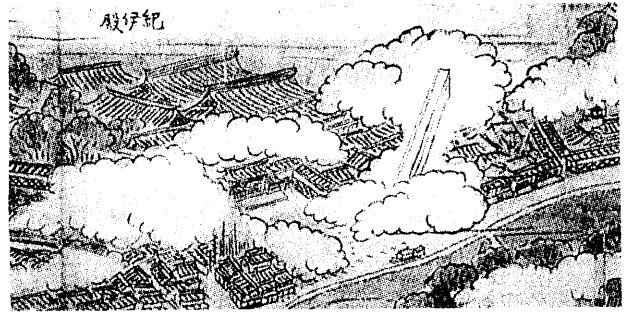


図-16 紀伊家右側の特異な景観（厚木市本）

画式のタッチであり、厚木市本では、明らかにそれと分かる加筆修正がなされている。

2) 絵師や発注者は、絵を通して何を伝えようとしたのか。絵画としての魅力に留まり得ないメッセージが、都市図屏風には隠されている。歴博本における、剣酢漿草や桔梗の紋は、その常識からの逸脱ゆえに、何らかのメッセージと考えざるを得ない。厚木市本における、紀伊家の屋敷脇の異様な構造物は一単純に我々の知識の欠如かもしれないが一何を示しているのか。

3) 江戸図と呼ばれる地図は、目的をもって制作された。とくに刊行図は、武家屋敷の位置を知るなど携行を目的とした。いっぽう、江戸図屏風は、地理的な整合性を江戸図に求めたが、その重要性は制作目的によって異なる。歴博本は、家光治世の都市構造を描くことが目的のひとつで、江戸図と対応関係にある。出光本は、名所絵のカラーズであり、江戸図との対応はしやすい。津山本は、都市構造を描く下地として江戸図を用いたが、表現上のデフォルメが多い。厚木市本は、地図との対応関係を強く意識している。

以上のように、都市図屏風の問題点を再確認した上で、江戸の都市空間を解明して行く作業は、具体的な都市空間と同時に、近世の人々が抱いていた都市江戸のイメージをも明らかにする端緒となると考える。

<注>

- 1) 「しんまちみつキ」については明らかにし得ないが、『三井文庫 沿革と利用の手引き』（三井文庫、1988）によると明治30年代に越後屋呉服店の社長であった三井高堅が収集した絵図類を聴氷閣文庫といい、昭和25年にUCパークレーに売却された。
- 2) 国立公文書館内閣文庫蔵。江戸全区域を範囲とした最古の図として知られるが、原本は存在しない。内閣文庫に所蔵されているのは、嘉永6年（1853）の写し。
- 3) 地図としては、文久2年（1862）の様相を復元した『江戸復原図』（東京都、1989）を下敷きにした。
- 4) 『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980。
- 5) 大阪城天守閣博物館蔵。
- 6) 万治2年（1659）刊行図（表-2の④）は原版も写図も現存しないため、検討から除外した。
- 7) 栗田元次「日本に於ける古刊都市図」『名古屋大学文学部研究論文集』2（史学1）、1952年3月。

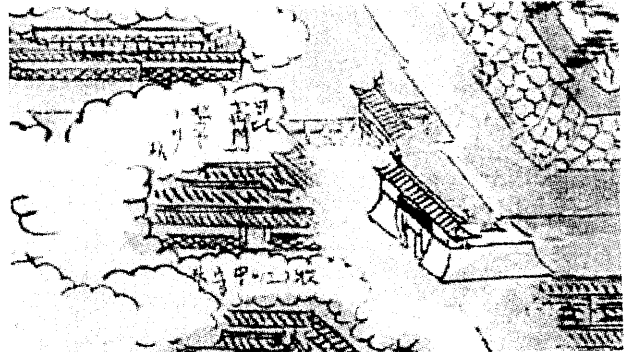


図-17 日比谷御門（厚木市本）

- 8) 古板江戸図集成刊行会編『古板江戸図集成』巻1、中央公論美術出版、1959。
- 9) 南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』創元社、1969。
- 10) 飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』築地書館、1988。
- 11) 小野忠重『古絵図考—日本古絵図集成解説—』岩崎美術社、1974。
- 12) 長沢規矩也「江戸の版図について」『書誌学』復刊新19号1970年5月。のち『長沢規矩也著作集』第8巻（汲古書院、1984）に収録。
- 13) 注7）、8）参照。
- 14) 川瀬一馬「寛永の江戸絵図—古板江戸絵図考（其の1）—」『書誌学』2巻1号、1934年1月。のち『日本書誌学之研究』（大日本雄弁会講談社、1943）に収録。
- 15) 岩田豊樹『日本書誌学大系11 江戸図総目録』青裳堂書店、1980。
- 16) 注11）参照。
- 17) 注12）参照。
- 18) 『正宝事録』107号。
- 19) 中村拓編『日本古地図大成』講談社、1972。
- 20) 絵図の商品価値を上げるために、屏風仕立てとしたのであろうが、同様の歴史的作品の改竄はこれまでにみなされており、残念なことである。
- 21) 図中には「フキヤ丁市村座」「サカイ丁中村カン三郎芝居」と書き込まれている。

<研究組織>

主査	波多野 純	日本工業大学教授
委員	小澤 弘	調布学園女子短期大学教授
〃	加藤 貴	
〃	丸山 伸彦	国立歴史民俗博物館助手